

理工系の若手女性研究者の一人として

As a young female researcher in science and engineering field

東大院総合文化 片山 裕美子¹

Grad. School of Arts and Sci., The Univ. Tokyo, ^oYumiko Katayama

E-mail: katayama@phys.c.u-tokyo.ac.jp

私は、無機固体物理を専門とする一若手女性研究者であり男女共同参画の立場で物事を考えてきたわけではありません。ですから、将来的な科学技術の発展に資するため、若手研究者の活躍推進には何が必要か？という問いにデータに基づいた議論を展開する立場にはありません。本公演では渦中にある若手研究者（実験系物理任期付助教、2歳と5歳の子供あり）の一人として、これまでの経験に基づいて個人的に感じた、感じている課題を述べさせていただければと思います。

現在の研究生活で課題である、もしくは不安であると感じるのは、①任期後はどうなるのか、②少ない時間を効率よく過ごすにはどうすればよいか、③ロールモデルがいないという3点に尽きます。①を解決するには、論文数や研究費獲得実績といった業績を積む必要がありますが、子育て期なものもあり②時間の確保に苦しむことが多く(とくに実験室での時間を確保することに苦慮します)、これを相談できる③ロールモデルはなかなかいないのが現状です。

特に、女性研究者という立場からみると、出産と育児の期間が、キャリア形成の時期と重なっていることが最も大きな課題であると思います。私は、博士過程の2年次に半年の休学(育休)を取得しました。当時は、研究者になれるかも分からない時期で、周りの男子学生が実験、論文を着々と進める中の研究中断で、この先どうなるのか非常に不安でした。日本学術振興会の特別研究員に採択されていなかったら、続けていくことはできなかったと思います。もちろん、研究室に子育てをしながらの研究生活について具体的な相談をできるような人はいませんでした。女性限定公募や、女性活躍推進の予算等、女性研究者にとっては有利な制度が多くあると感じており、物理・工学系だから女性は不利であるというのは感じたことはありません。ただ、出産と続く育児をするとすると、ある程度の研究の中断、効率の低下は避けられないので、これが進学等を阻む要素にならない環境づくりが重要だと思います。

また、大学院生当時の私は、京都大学男女共同参画推進センター(当時)が公開していた女性研究者の先生方が書いた「研究者になる」という連載を読んで励ましになっていました。なるべく多くの人のキャリアパスとライフイベントの様子を知ることが、私のこれまでの研究生活を続けるための選択に非常に参考になりました。そこで、私の経験が誰かの参考になればという視点で、これまでに研究生活の中で活用した制度や経験として学振研究員制度(とくに RPD)、夫の育児休職、フランス留学、任期付助教への着任、子連れ単身赴任、夫の転勤等についても本公演で触れたいと思います。